

## 6. 総括

## 1) これまでのまとめ

本報告書は、第2章から第5章にわたり、「山武らしさ」を導き出すための調査とその結果をまとめた。

第2章では、山武市の地理的概要をまとめ、景観構造を見出した。その結果、「山武市には、地形的特性による三面性を持った農村景観および海岸景観があり、「山武らしさ」とは、こうした景観が保全されていることである」という仮説を導きだした。

第3章では、千葉大学の学生によるまちづくり提案から「山武らしさ」を導きだした。作成された64の提案の内、包含された頻度の高い要素を調べると、農村景観が23件(35.9%)と最も高い。その内、旧成東町を対象地に作成された提案に着目すると、農村景観を提案に包含した提案は9件だった。

この9件について分析すると、駅から北側、および駅は、遠景に山林、中景に田畑の景観が認識され、それらの総体的な景観が、提案に反映されている。成東駅と海岸の中間地域や線路沿いは、提案対象地が沖積平野にあり、田園景観が提案に反映されていることが分かった。よって、第2章で導き出した仮説と同様のことが第3章でも言うことができた。

第4章では、成東駅周辺の歴史の変遷を地図から把握した。その結果、成東駅の周辺は成東駅の設置を契機として成長しており、その起源は、上町、下町にあると推察することができた。

第5章では、成東駅周辺を住民以外の人々によってまち歩きを行い、個々人が認識した「魅力的な場所」、「課題にある場所」、「どちらでもないが気になる場所」を1枚の地図にまとめた。その結果、土手は河川整備にとどまらず、人が憩える場として完成されていたことに加え、市民が花を植えるなどの活動が垣間見られる場所であり、魅力的な場所として認識される傾向にあった。汚水やゴミの散乱などの未整備な状態や衛生的に課題のある場所は、課題にある場所として認識される傾向にあった。よってこの活動から、第2章で導き出した仮説とは別の「山武らしさ」を導き出すことができた。

## 2) 駅前整備に向けて

第2章から第5章までの結果から、やや広範囲に山武市を捉えた際には、「農村景観」が「山武らしさ」である。その特性は、丘陵地帯や沖積平野などの地形による景観であり、具体的に述べるなら山林、里山、田園景観のことを指す。ところが、範囲を成東駅周辺の狭い範囲に限定すると、人が憩える場や、市民が花を植えるなどの活動が垣間見られる場所が、「山武らしさ」となる。双方に共通する点は、どちらも市民の手が加わっていること、自然的要素であること、である。決してコンクリートが表出する建築物や高層建築物を指すものではないことが分かった。

しかし、耐震性や公共性を考えた際に、コンクリートを用いた建物の出現が余儀なくされるかも知れない。その際もし、そこに市民の手が加わり、より「山武らしさ」に近づけていくことができたなら、そこは魅力的な場所になっていくであろう。花壇の設置や植栽などその手法は多くある。逆に、出現した空間を完成されたものとして、一種の諦めや放置が起これば、そこには「山武らしさ」は生まれず、魅力的な場所にならないだろう。すなわち、多くの市民が「山武らしさ」について考え、その上で共通の「山武らしさ」を継続的に見出していくことが重要である。